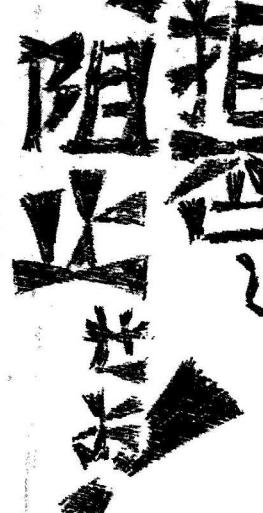


反戦会議通稿

168.12.3
No.15

東京教育大学
反戦会議

全学集中合意拒否



フロンティア冒に找々反戦会議に対し「好意ある
レ批判があつたので、全学斗を強化し、現在の危杵
を突破する立場から若干の反批判を行つた」。

26日守代所封鎖斗争の敗北に端を発しかつ顯在化
した全学斗のヘゲモニーの後退と根底的基盤の弱体
は、学校当局の14-28全学集会・授業再開路線の定
着化の実質的進行と、それと相互規定する日共リ民
青の「全学協議会設置・民主化・路線のヘゲモニー
掌握とハウニつの方向からの挙事の中でますますそ
の危杵を深化させ、全学斗の組織的保証それが自体も
また危杵的状況にある中で、大衆として斗う学友に
対して何うの責任もはたしえず、展望も出しえない
と云う、まさに文字通りのストライキ斗争の成否に
かかれる危杵的状況は、大衆の大半リ民青の集・合
い路線への負の流动化を開始させ、それは、当局の
リスト收拾の固い意志と展望と日共リ民青の「話し合
い・路線の学内に於ける貫徹とは全く逆比例的に、
全学斗の内部に28日回答にのつていく部分が存在
することにすつて、その負の流动化は、ますます助
長され過速度的に深化拡大されていい。それが故找々
の絶対的に緊急な課題は、このさうな危杵をもたら
した根本に対する徹底した総括と、そして單に局面
打開のみではなく以後の斗争方針とハウもの明確
に打ち出し、現在の「全学集中合意路線の雪崩水辺升
とハウ負の流动化を防ぎ止め、当局と日共リ民青に
対する總反対を行つことが、何よりも必要とされて
いるのだ。

負の流动化そのものは、14回答に於ての対応が
①の団交を前提としている②筑波が討題に上つてい
る③と云う点からの暴露主義的対応とハウ無方針で
あつたため、日共リ民青の「民主化・路線の犯罪性
反革命性に対する根柢的理証的批判と実践が欠落し
ていた所に根ざして云ふ。それ自身は、
全学斗の実質化粗糲化を全くサボージュして、
日共リ民青のみを誘示するという全学斗の危杵

を正しく見抜けず、全学斗とその路線の一定の悪性
とハウ全学斗への過信と過大評価にぬくぬくこ守
住していったことにすつて醸成されたものであつた
そのような全学斗に対する眞剣な自己点検の欠落は
単にその組織化実質化にとどまらず、日共リ民青に
対する反民感情しが形成せず、それが故に必然的に
日共リ民青にうちかつ思想的理論的実践的武装と相
決をサボり、さらにまたそれが日共リ民青の過少討
伐生み出していく、といふ全くごたらめな悪循環
を放置しておいたことによつて固められてはつた。
その結果大学当局からの様々な強圧・策動に対して
すぐさま反対を行ひえず、「情報待ち」とハウ無方
針ぶりを露呈してしまつてはいる。それが一体どれ程
の痛手と一つの我々に負わせつけるのか、報復戦術エスカレーシヨンとハウ方針を全学斗の實
的量的強化と切斷した所で追ひ求めた結果、我々は
26日守代所封鎖斗争を貫徹し之ないばかりか、絶対
的危杵に追い込まれてしまつてはいるのだ。

負の流动化の第二の要因は、種々な概念規定の不
一致によるのである。「筑波移転実力阻止」という
の意味内容は、「移転」の論理と「阻止」の論理との
間は正に非和解的なものであり、それは「話し合
い」で解決がついたりするものでないこと、我々はそ
の表現としてバリケードを築きあげたのであるにも
拘らず、28日回答にのつていくといふことは全く「
実力しの何たるかを理解しえない諸君のすることで
しかない。運動論的立場から「実力斗争」と本末倒
には否定する諸君の実力斗争とは一体何を意味する
のか。收拾策とわかつておりながら、様々な無理で
正当付けをもつて予備折衝に応じることが「実力」
なのかな?

諸君はバリケードの意味を再度明確に記えてほしいものである。このように実力斗争の意味内容を全く理解していなかつたり、歪曲化され理解していることが、28回答に対しそれを拒否することにより、大学当局とは其民衆との立場をたゞさりあらずの態度を鮮明化させ、それによって生ずる流动化を王の立場へ導くというヨギのダイナミズムを全く理解しえず、「一般学生から浮く」とか、大学側の「議歩」であるとか、「中間方の獲得」は、オニ一義的に我々の立場主体が強固に存在していなければならぬ。だが、全学歩へその力が現たあるだらうが「暴口回交」自身は一般的に否定するものではないが、しかし、その内容を決定していくのは、これ又、国交の場とその外の力関係でしがない。自己的態度を「争端」接觸をうける」という全く不鮮明にしたままで、いづれ「中間方への屈服」でしがない。中間方を自己主体の確立ぬきに獲得しようとしたとたんに敗北への道、即ち、28回答への屈服は開始されるのだ。「事ム局」は28回答の受諾——追求すべき国交を「暴露国交」であると主張しているが、彼らは追求すべき国交を「獲得国交」として想定している。そもそも「獲得国交」とは、「国交」の中で何をが解決すると考える話し合い路線への轉落をインペイするマヌーバーとして「暴露国交」と「獲得国交」との言葉の使い分けがあるのだ。「話し合い」で解決しえないことが、それ自身が我々の主張する国交の理論を形成する。即ち我々の目的とする国交とは、あくまでも「確認国交」であり、斗争の最終局面に於て行われるものである。大学当局が国交を認めるといふことは、同時に現在の大学のブルジョア的秩序とそれを支えていた教授自身の思想性を全面的に否定し直に批判することであり、又同時にその決定を白紙撤回する論理と同じものでなければならぬのだ。これが階級移転実力阻止の内容なのだと、このことを理解しえぬが故に4回答と28回答との間に眞的差異を認めた。大學当局が議歩したと考え込んではしまう僕の要因があるのだ。14・28回答が、大学当局の授業再開リスト収拾リ出席集会リ移転実力阻止の件によつて、「議歩」というポーズを取つて新しい攻撃がなされ、このように実力斗争、実力阻止、国交等に対する僕少な理解といううつたが、座卓斗の理論的貢献を決定していき、その結果、日共リ民衆と大学当局に対しても

の斗いを不徹底なものにしているのである。日共リ民衆の「民主化」路線の犯罪性、反革命性は、11.10付赤旗の「当面する大学問題の解決のために」と題する論文が足とを語つてゐる。大学運営の「民主化」と「トロッキスト排除」を骨子としたこの論文は、大学問題の根幹をあたすも大学内的問題としてし乍らの本質たる帝国主義の腐敗女隕蔽し、斗争を「大學生運動の民主化」などという非現実的な幻想に溺れさせろのみならず、國家权力の土壤の内側に、武装解除した人民大衆の手をしばりつけようとするものである。大学運営の腐敗は、アルジヨアイデオロギー支配の中枢として直接国家权力支配を表現するものとしてあるのであって、又、大学運営に学生たちの参加されたとしてモ、それはたゞ帝国主義の大學生支配を左から支えるもの以外の何物とも意味しない。28回答への日共リ民衆の單面的贅美はその裏にこのような犯罪性を持つてゐるのだが、それに對して要求項目の差という形で、統一代表団の形成とバラ形の対決しようとするのは、日共リ民衆に対する屈服の始まりであり、移転承認の道へ進むことになると言えるであらう。諸君の最大の誤りは、斗争の解決として大衆国交に一切をかけこなさること、即ちバリケード死守について一言も語られていねど。その大衆国交を追い求めることにより、学生斗を文学部内に同じこめることにつつて單面的には足学斗の放棄、さらにまた、大衆に対する我々の路線の鮮明化を恐れそれを放棄していふことがあつる。自己批判の中から生まれた方針——七項目四条件——はこの斗争の眞の展望を持つていいなればなり、足学斗の真剣な組織化實効化をせんり、大衆に対しても「話し合い」への幻想を与える実では、その前の方針と何ら變るものではないばかりか、「愛はる」前段は何らの変更もされていないのである。我々に對しては「無展望、待期主義」と批判する以前に、諸君の追望主義と、ヨラ学交と大衆に対する方針がどうなぞるに徹底して自己批判する事態が生じてゐる。28回答が移転承認、移転阻止パリケード斗に對しては、28回答区撫正し、足学集会区撫止のよこく、

28回答は、断呼拒否しなければ我々全学斗の主体強化もありえないだろ。何故なら、大学当局と田井・民青とバリケードを通じての対決なくして我々の力が増大すると看えることは想定があるからであり、主体と「うものは常に权力との斗争の中で強化されるものだからだ。自ら「筑波移転実力阻止」の立場に立たせることを放棄して、一体どうしこ中商戸を獲得できるのか。28回答文語は原則面から、運動面、理論面全てにわたって誤りであり、移転承認のオ一步又進むものとしか結果しない。我々は28回答を拒否するにとどまらず、大学当局の收拾路線の田井・民青の「民主化路線」への押し込みをねじった28回答の產物「全学集会を我々の移転実力阻止斗争に最も敵対するものとして、その阻止をめざして、全学斗及徹底的に組織化していく必要があるし、この立場に立つて組織化しない限り、斗争の勝利的展望はないのだ。

組織化せよ、組織化せよ、徹底的に組織化せよ！

28回答拒否 !!

全学集会阻止 !!
民主化路線粉碎 !!
筑波移転実力阻止 !!
全てのバリケードを死守せよ !!